

書評

著者名 Anne Bourgain-Wattiau

Mallarmé ou la création au bord du gouffre

L'Harmattan、1996、225 頁。

山本昇弥*

はじめに

Mallarmé ou la création au bord du gouffre の著者である Anne Bourgain-Wattiau (1962-) は、児童精神医学の臨床心理士として勤めた経歴を持ち、現在ではポール＝ヴァレリー・モンペリエ 3 大学にて精神分析を教えている。あらかじめ本書の概観を述べるのであれば、本書ではマラルメの詩的言語に対して「彼の人生における中心的な出来事よりも、テキストであれ非テキストであれ、彼の言説を優先させる *donne la préférence au discours de l'écrivain—texte ou hors-texte—plutôt qu'aux événements centraux de sa vie*」⁽¹⁾ という方法をとることでマラルメの詩的言語を分析する試みがなされる。本書においてその試みは、息子アナトールの「死」というマラルメにとって中心的な出来事をマラルメの言語の「限界」として位置づけることによって、彼の詩的言語を解釈するものとしてあらわれるだろう。

また、Bourgain が本書の試みを「臨床 clinique」として位置づけていることに留意したい。すなわち本書での試みは、あるひとつの言語を、なにかひとつの意味を指示する記号としてではなく、力動的な身体の徴候 *signe* のようにしてマラルメのテキストを読み取ることにあるのだ。ここから本書における Bourgain の意図がテキストの「限界」を設定することで、マラルメの詩的言語を自らの読解に縮約することにあるのではなく、むしろそのような読みによって示されるマラルメの詩的言語の自律的な力を示すことにあると理解することができるだろう⁽²⁾。本書序文を執筆したメイン大学名誉教授 Jean Georges の言葉を借りれば、マラルメの言語が「死の運動に由来する生によって、言葉では言い表せないものを形作っている」⁽³⁾ ことを、Bourgain は「臨床」によって示すのだ。

このことは、次の三つの議論をもとに示される。まず第一部で議論される

* 大阪大学人間科学研究科博士前期課程；u496045c@ecs.osaka-u.ac.jp

ことになる「夢 *rêve*」というテーマ、第二部で議論される「死 *mort*」。そして、第三部にて議論される「偶然性 *hasard*」というテーマである。以下の書評では、以上の三つのテーマを中心に本書の概要をみていきたい。

本書の概要

まず第一部「マラルメの理想と夢」では、マラルメの生涯を通じた言語への熱情が分析される。そこで Bourgain は、ありのままの現実を言語によって捉える試みをマラルメの熱情の核心として位置づける。しかし、この試みを実現するためには、現実を分節化する言語を媒介にして、ありのままの現実を把握するという倒錯的な「分裂」の問題に対処する必要がある。この点に関して Bourgain はマラルメが個人宛の書簡において、美しい自然を直接観照するために読書をやめようとしていたことや、「まだ若く、災いの穢れも知らぬ大地」という『花々』における一節を引用し、マラルメがこの「分裂」を自覚していたことを明らかにする。この自覚を踏まえ、Bourgain はマラルメが言語と現実の調和を図る方法として「夢」の言語の構築、すなわち「自閉症的な後退にも似た避難所の構築」⁽⁴⁾を採用したと指摘する。ここでいう「夢」の言語とは端的に言えば、現実的な対象から切り離された言語のことである。Bourgain によると、この言語は『詩の危機』における言語観に結実している。その言語観とは「花」と言うときに示されるのは現実の花ではなく、むしろ「[現実の] あらゆる花束のなかには存在しない花、気持ちのよい、観念そのものである花」が音楽的に立ち上がることが示されるような言語観である。つまり、マラルメは言語を、単に現実を指示する記号と見なさず、それ自体で観念を喚起する物質として捉えることによって「夢」の言語を構想していたということである。そして Bourgain はマラルメが「夢」の言語を通じて、言語の潜在的な力にとどまり、現実を退けることで、逆説的に現実を言語から解放されたありのままの姿にとどまらせていると論じるのである⁽⁵⁾。このようにして、Bourgain はマラルメが「夢」の言語によって、ありのままの現実を追求したことを明らかにするのだ。

続く第二部「マラルメと限界の経験」では、フィリップ・ソレルスやモーリス・ブランショ、ミシェル・フーコーの文学論をもとに「限界 *limite*」の

観点からマラルメの「夢」の言語が再考される。ここで Bourgain はマラルメの人生における中心的な出来事である息子アナトールの「死」をマラルメのテキストにおける「限界」として位置づける。この限界の設定によって Bourgain は、第一部で分析されたありのままの現実との調和を試みる「夢」の言語の無力さを露呈させるのである。Bourgain によれば、この無力さは亡くなった息子アナトールの覚書を断片的に記した『アナトールの墓』において露呈している。『アナトールの墓』において「父と息子の婚姻」という表現にみられるように、マラルメは息子アナトールの「死」を詩によって「封じ込め」、理念として彼を蘇らせようと試みる。しかし、その試みは失敗に終わる。それというのも第一部で示したようにマラルメの詩的言語たる「夢」の言語は現実には干渉しないことによって言語の潜在的な力に留まるものであったからだ。つまり、マラルメがアナトールを詩に封じ込めたとしても、それは現実とは切り離された「夢」の領域に留まるだけであるということだ。このようにして Bourgain は、この詩的言語による「封じ込め」が分裂を解消し、アナトールを生き返らせる行為にはならないことを指摘する。しかし同時に、この契機を通じて Bourgain は、マラルメの「夢」の言語が「封じ込め」や現実からの後退とは異なる新たな言語表現の可能性を秘めていることを読み取るのだ⁽⁶⁾。

そこで第三部「再構築」では、「夢」の言語の新たな可能性が、「偶然性 *hasard*」というテーマを言語に取り込むことを通して分析される。ここで焦点が置かれるのは、「夢」の言語と現実とを一致させることではなく、「夢」の言語を現実化することにある。このことについて、Bourgain はマラルメの『英単語』における言語観に着目している。Bourgain によれば、『英単語』においてマラルメは言語と言語が表現するものの関係を、動詞と他の品詞（実詞）によって変形させられた動詞との関係のような一時的かつ流動的なものとして捉えている。この言語観に基づき Bourgain は、マラルメの詩的言語を再定義するのだ。つまり Bourgain は、繰り返す音声として読まれることで生じた多様な「響き」により、多様な解釈が発生するような言語として、マラルメの「夢」の言語を捉えたのである⁽⁸⁾。この「偶然性」を内包した「夢」の言語は、さまざまな読みに開かれている。そのさまざまな解釈が成立することこそが「夢」の言語に現実性を与える条件となるのである。Bourgain は、現実を「穢れなき」純粋なものとしてではなく、あらゆる言語表現が成立す

る場として捉えることによって、マラルメの夢への退行を現実への還帰に昇華させるのだ。

こうして言語の「偶然性」は、「夢」の言語という詩的言語を実現する。「骰子一擲」や「書物」というマラルメの中心的なモチーフに通底する「偶然性」を抱擁する言語観を、Bourgain はマラルメの「夢」の言語における新たな可能性として模索したのである。

現代思想とマラルメ解釈

これまでマラルメにおける偶然性というテーマは、多くの解釈がなされてきた。Robert Greer Cohn によれば 20 世紀初頭までの解釈において、マラルメにおける偶然性は、必然的な理想のうちに解消されるという象徴主義的な文脈に位置付けられてきた⁹⁾。しかし、これまでの議論で示されたように Bourgain はマラルメにおける偶然性を、必然的な理想のうちに還元されるものとして捉えていないことは明らかである。Bourgain は「夢」の言語がさまざまな解釈へと開かれ、その意味を現実化する契機として偶然性を解釈したのである。

評者の理解が正しければ、本書において示された Bourgain の解釈は、ジル・ドゥルーズが『意味の論理学』にて展開した表面の議論におけるマラルメの位置づけに比することができるものであろう。『意味の論理学』においてドゥルーズはルイス・キャロルの分析を通して「表面」の議論を展開する。「表面」とは、かばん語、秘教的な語という「パラドクスの要素」をもつ語が、表現するものと表現されるものの二項、それぞれを「効果」として生じさせるような場である¹⁰⁾。ドゥルーズはこの秘教的な語とそこから生じる言語を、不定形の動詞と実詞によって変化した動詞との関係に準え、言語の意味の生成における偶然性を重視するのだ。そして、ドゥルーズはこの偶然性によって意味が生じる「表面」にマラルメの「骰子一擲」を位置づけるのである。本書第三部における議論を思い起こそう。ここで Bourgain は、マラルメの詩的言語が「偶然性」を内包することによって、多様な解釈、多様な意味を発生させる原理としてはたらくことを示したのであった。この Bourgain の読解は、異なる文脈ではあるがドゥルーズにおける「表面」の偶

然性と意味の生成という議論と軌を一にしていると読み取ることができる(11)。

また **Bonnie J. Isaac** の論考によると、ドゥルーズに限らずミシェル・セール、ジャック・デリダ、ジュリア・クリステヴァといった 20 世紀のフランスを代表する思想家によるマラルメの解釈は、「偶然性」を意味の生成の原理として捉える傾向にある(12)。**Bourgain** の解釈もまた、偶然性によって現実化する解釈の多様性をマラルメの「夢」の言語に見出すものであり、この解釈の潮流に位置付けられるものだろう。

おわりに

本稿冒頭で述べた **Bourgain** の本書での意図をより明確にすることができる。これまでみてきたように本書を通じて、**Bourgain** はマラルメのテキストに対して「死」という外を設置することで、「夢」の言語の無力さとその可能性を明らかにしたのであった。第一部では、マラルメがありのままの現実の実現を「夢」への退行に求め、「夢」の言語の構築を試みたことを論じ、第二部ではアナトールの死によってマラルメが「夢」の言語の無力さに直面することを明らかにする。そして第三部において、**Bourgain** は「偶然性」を通じて「夢」の言語が多様な解釈に開かれることで、「夢」の言語と現実との新たな結びつきを示し、詩的言語の自律的な力を浮き彫りにしたのであった。**Bourgain** はマラルメのテキストを「死」に帰属させるのではなく、「死」によって絶えず生まれ変わる「生」のはたらきにテキストを結びつけることで、「死の運動」に由来する生によって、言葉では言い表せないものを形作る。詩的言語の自律的な力を示すのである。この試みは言語を力動的な徴候として捉える「臨床」として結実するのである。

注

- (1) **Bourgain** (1996) p.13
- (2) **Bourgain** (1996) p.13
- (3) **Bourgain** (1996) p.9
- (4) **Bourgain** (1996) p.57

- (5) Bourgain (1996) p.64
 (6) Bourgain (1996) p.120
 (7) Bourgain (1996) p.186
 (8) Bourgain (1996) p.189
 (9) Cohn (1949) p.4
 (10) Deleuze (1969) pp.105-106/ ドゥルーズ (2007) 『意味の論理学 (上)』 158-159 頁。
 (11) 『意味の論理学 (上)』では、ジャック・シェレーが編纂した「書物について」が参照され、マラルメの「骰子の一擲」が表面の言語の構築の過程として位置づけられている。(Deleuze (1969) p.82/ ドゥルーズ (2007) 『意味の論理学 (上)』 125 頁。)
 (12) Isaac (1981) pp.826-829

参考文献

- マラルメ、ステファヌ 2010 『マラルメ全集 1』安藤元雄・菅野昭正・清水徹・竹内信夫・松室三郎・渡辺守章訳、筑摩書房。
- 2010 『マラルメ全集 2』阿部良雄・菅野昭正・渋谷孝輔・清水徹・高橋康也・豊崎光一・松室三郎・宮原信訳、筑摩書房。
- 1998 『マラルメ全集 3』阿部良雄・安藤元雄・井原鉄雄・兼子正勝・川瀬武夫・渋谷孝輔・清水徹・高橋康也・竹内信夫・田中淳一・松室三郎・宮原信・與謝野文子・立仙順朗・渡辺守章訳、筑摩書房。
- Bourgain-Wattiau, Anne. 1996. *Mallarmé ou la création au bord du gouffre*. Paris: L'Harmattan.
- Cohn, Robert Greer. 1949. *Mallarmé's "Un Coup de dés": An Exegesis*. New Haven: Yale French Studies Publication.
- Deleuze, Gilles. 1969. *Logique du sens*. Paris: Minit. (ドゥルーズ、ジル 2007 『意味の論理学 (上/下)』 小泉義之訳、河出文庫。)
- Isaac, Bonnie J. 1981. "Du fond d'un naufrage": Notes on Michel Serres and Mallarmé's "Un Coup de dés". Baltimore: The Johns Hopkins University Press, pp.824-838.